

総 論

第2期聞き取り調査(1964-1974年卒)を終えて

小林 瑞乃

1. はじめに

全国の同窓会7支部と高等部出身の卒業生について7人で分担執筆した「卒業生聞き取り調査のまとめ」による成果を踏まえ、本稿では全体的な把握によって見出し得ることについて分析・考察する。今回聞き取り調査を行った全対象者について年代別に示したものが、下の一覧である。以下、出身高校と進路選択、入学後の変化、学業、学内外の活動・経験、卒業後の進路及び社会活動・ボランティア・生涯学習、人生における「青短」の意義の6つに分けて概観した結果を論じていく。

<年代別聞き取り対象者数一覧>

卒業年	国文	英文	家政	児童教育	教養	計(卒業年別)
1964(昭和39)		1				1
1965(昭和40)		3	(2)			3(2)
1966(昭和41)	1	2				3
1967(昭和42)		1	1	1		3
1968(昭和43)	2		3	1	1	7
1969(昭和44)	1	1	1		2	5
1970(昭和45)	2	1	2		1	6
1971(昭和46)		(1)	3 [2]		1	4(1) [2]
1972(昭和47)	1	3			1	5
1973(昭和48)	2(1)	1		(1)	2	5(2)
1974(昭和49)	3	1	1			5
計(学科別)	12(1)	14(1)	11(2) [2]	2(1)	8	47(5)[2]:総計54

※()内は高等部出身者数、[]内は専攻科卒業生数。例えば国文学科を卒業後に専攻科を卒業した場合は専攻科卒業生に分類した。

2. 出身高校と進路選択

ここでは出身高校や進学に関する状況、進路決定の要因などについて見ていく。

2.1 出身高校について

まず、地方出身者の出身高校は私立・公立問わずその多くが地元で著名な進学校であり、高校内では進学コースなど四大進学を前提とした環境で学んでいる場合が多く見られた。男子生徒は東京の大学を目指し女子生徒は地元や周辺地域の四大・短大への進学に偏りがちであるといったジェンダー格差のある進路傾向は依然として見られるが、女子高等教育に対する理解が進み四大・短大進学は当たり前であるといった感覚が以前より進んでいたことがわかった。

ただし、四大か短大かという選択にあたっては、「女の子は四大はダメだ」と父親に反対されて半強制的に短大家政科に進学した事例（例えば四国Bなど）などに見るように短大志向が根強く、特に就職を視野に入れて短大が選択される傾向が顕著になっていた。これが今回確認できた第一の特徴である。

就職という観点からいえば、アナウンサーを志望していたケースで、採用に短大卒が多いということも進路に影響していた。また、高校の進路状況を聞いている中で薬学部の話が出ることもあり、就職を見据えて四大なら薬学部という選択肢も考えられていたようである。

一般的に四大卒は就職が難しいといわれ短大を選択した事例も多くあり、同志社大学に合格したが青短に進学した四国Aのほか、「短大の方が難しい」「短大が人気だった」という話もそれを裏付けるものである。就職と青短・短大人気の結びつきについては河見研究員と後藤研究員が指摘しており、表1が示すように1965年の高等教育進学率は、女子の大学進学率4.6%（男子20.7%）、短期大学への女子の進学率は6.7%であった。以下、今回対象とする1964年から1974年までを見ても、女子の短大への進学率は大学への進学率を常に上回り、年々増加傾向にあった。

表1 進学率の推移

年次	短期大学		大学		大学・短期大学	
	女	男	女	男	女	男
1964年	6.5	2.3	5.1	25.6	11.6	27.9
1965年	6.7	1.7	4.6	20.7	11.3	22.4
1966年	7.3	1.5	4.5	18.7	11.8	20.2
1967年	8.5	1.6	4.9	20.5	13.4	22.2
1968年	9.2	1.7	5.2	22	14.4	23.8
1969年	10.3	1.9	5.8	24.7	16.1	26.6
1970年	11.2	2	6.5	27.3	17.7	29.2
1971年	12.8	2.2	8	30.3	20.8	32.5
1972年	14.4	2.2	9.3	33.5	23.7	35.7
1973年	16.4	2.4	10.6	35.6	27	38
1974年	18.2	2.4	11.6	38.1	29.8	40.5
1975年	20.2	2.6	12.7	41	32.9	43.6

「学校基本調査」（文部科学省）より作成¹

（過年度高卒者等を含む。大学は学部、短大は本科への進学率を示す。）

また、第1期と同様に兄弟は四大で姉妹は短大というように家庭内のジェンダー格差を当然のように受け入れていた事例も見られた。東京出身である関西Dも父（明治44年生まれ）に四大を反対されたが母の後押しで短大進学が可能になったことなど、第1期と共通点の多い例である。父は妹（4歳下）の進学に際しては四大を目指すことに反対はしなかったという。四大は婚期が遅れると父が反対し、家政なら花嫁準備になると説得したケース（東北G）なども第1期と共通点の多い事例である。女の子は短大という母の意向（九州A）、22歳までに結婚してほしいといわれた事例（九州E）など、ジェンダー規範の強い価値意識も根強かったことが明示されている。また、経済的事情からの選択もあった。

全体的な傾向としては東京への進学者も多くなり、本人の意思が尊重され自由に進路が決定され、上京のハードルも下がっていたことがわかる。ただその場合でも、両親が東京出身であったり、東海支部のように地理的な近さであったり、また東京在住の親戚の存在が後押しする要因になっていたことなども確認できた。

家族の反対を押し切って強い意志で青短進学を勝ち取ったケース（北海道E）は今回では少数派であるが、第1期の地方出身者の代表的事例と共通する点が多く、Eは限られた情報の中で青短を目指し、地元にいるままで終わることへの漠然とした不安と東京への憧れが新たな世界へ飛び出す原動力となっていた。最終的に両親が進学を許可したのは、寮があることと東京在住の叔父夫婦の存在であった。

次に、東京・首都圏出身者の場合であるが、今回は多種多様な学びの環境にあったことがわかった。例えば、中高一貫の高校では四大志向が強く、首都圏の進学校であるミッション系私立女子高校の場合は、四大進学が多いということであった。他方、都立高校についてみると、国立進学を目指す進学校の場合は女子も四大進学が多かったということであるが、旧制高等女学校を前身とする都立高校では進学クラスの他に女子の多数を占める就職クラスがあるように就職希望者が多く、女子の進学先としては短大・専門学校となる傾向が見られた。また美術学校が前身の都立高校では、男子も含めて大学進学は少数派であり女子は就職が多かったという。そのような様々な進路選択のなされる環境にある中で、青短が進学先として選ばれていたことが確認できた。

2.2 青短進学の原因

それではなぜ青短を選び進学したのか、本項ではその動機についてまとめる。

まず全体的にいえるのは、青山という「ブランド」に魅力を感じていることである。今回の調査からも、地方出身にとっては地元の四大よりも東京の青短、そして青山学院の四大も望ましい進路先と考えられていたことが示されていた。これは、青山の知名度、地の利やキャンパスへの憧れ、そして「短大の東大」と表現されたように短大のトップに立つとされる青短への高評価などがトータルに掛け合わされての「ブランド力」だといえるだろう。各支部のまとめには青山の雰囲気や青短の教育方針への共感などが多く語られており、特に地方出身者にとっては自分にあった学びの場がここにあると感じて上京を決意す

る、それだけの吸引力があったことは明らかである。

次に、この「ブランド力」が進路にどのように影響したのか具体的に見ていく。進路決定にあたっては、第一に、両親や親戚、教師など周囲の人々の青山学院・青短への高評価が本人に与えた影響がある。第1期にみたように、短大の創設以前から既に定評のあった青山学院の女子教育に対する信頼と評価が進学先として望ましい名門校として認識され、志望校の上位に位置してきた実績が積み重なっていたのだといえよう。「短大の東大」であるといわれていたり、短大なら青短か東女かだといった高校教師のアドバイス（北海道C）などはその好例である。また、兄から「女の子は青短」といわれて姉妹ともに青短に進学している事例があるように、ジェンダー規範に沿った価値観によって子女や姉妹にふさわしい進学先だとする認識は第1期に引き続き見出せる傾向である。東京出身の父が子どもの進路先として四大を進める事例（関西A）もあり、Aはのちに青山学院大学に編入学した。Aの父は、就職後の経済的自立を念頭に四大進学を勧めたのだという。

第二に、青山学院出身の親戚や知人などによる影響で、青山学院や青短に学んでいる身近な存在は大きかった。例えば、従姉妹が初等部から学んでおり制服やキャンパスへの憧れがあったこと（北海道D）、従姉妹の友人が青短に通っていた影響（北海道C）などが挙げられる。これについては高等部からの進学者にもはっきりしている傾向で、父母や姉が青山学院で学んでいた環境から当然のように進学が目指され、親の強い意向で中等部受験をしたケースなどがある。父が高等部から経済学部へ、母が青山女学院出身、父が青山中高等部から早稲田大学へ、姉が高等部、父が青学卒などにみるように、こうした「青山ファミリー」のネットワークも進学を推進する力となっていたといえるのである。

第三に、青山学院の魅力には、「ミッションスクール」に抱かれるプラスイメージも重なっていた。例えば、ミッションスクールであることが一つの価値基準となっていたケース（九州A・B）、中高校時代にミッションスクールで学んでいて身近であったケース（九州D）などである。この他、神奈川出身の中国Fはミッション系の高校に学んで青山への憧れがあったこと、東京出身の関西Gもミッション系の女子高在学中に学校交歓会で青山高等部を訪れたことがきっかけで青山ファンになったことも進学の動機となったという。

以上のように、両親・親族、教師等の高評価、青山学院で学んだ身内の存在、ミッションスクールであることへの好印象や期待など相まって定着していた青山「ブランド」の影響が青短への進学を決定づけていたといえるだろう。

表2からもわかるように入学志願者の倍率は常に上昇傾向で、進路の志望先として高く支持されていたことは明らかである。また、入学者の出身は第1期に引き続き東京と関東が非常に多く地方出身者は少数であり、地方出身者は厳しい受験競争を勝ち抜いてきたといえるのであった²。

2.3 学科の選択

ここでは、学科を選ぶ際にどのような判断がなされていたかなどについて見ていく

い。当然のことではあるが、まずは得意な科目や学びたい分野などから自分にとって最適な学科はどこかを考えて決定されている場合が多かった。

例えば、家政学科の場合であれば数学や生物など理系の受験科目があること、文学への興味が強い場合は国文学科、教養学科については哲学・思想への関心や人生に良い影響を得られるだろうといった観点など人間や人生への興味関心の強い生徒の進学先として選ばれ、新設された教養学科の持つ魅力や高校生にとってのイメージなどの一端が示されているといえるだろう。英文学科は「英語の青短」というイメージが広く浸透し、さらに就職率の高さもあって人気を集め、児童教育はカリキュラムの独自性やユニークな実技科目などから関心を集めていた。少数ではあるが、大学受験ラジオ講座で森野宗明を知り、この先生に学びたいと思い国文を目指したケース（関西H）や、教養の講師陣に小林信明や加藤楸邨の名を見て選択したケースも見られた（中国E）。

どの学科も受験生に支持されて、中には複数の学科を受験することもあったようである。その一例として、結果的には第二希望の学科に合格し、高校教師などに相談して自分にふさわしい進学先として納得して入学したケースがある。これは青短人気というだけでなく、それ以上に教養教育を柱とした青短の理念と各学科の学びの内容が入学したいという希望が持てるカリキュラムであったといえるだろう。

その中で例外的なものとしては、父親に東京に行けといわれたケース（九州Cなど）や、また地元を離れたいという思いから上京を望んだケースがある。関西Bは、上京・進学を両親に反対されたのだがそれに屈せず、過干渉の親から独立することを望み、母方の在京の叔父の存在があって許可された。新幹線開通によって移動時間は短縮されたものの日本の首都、大都会東京はなお遠く、特に地方出身者にとっては特別な魅力と地方の呪縛から逃れて自己解放するための大きな意義を持つ場所であった。

以上のように、青短と学科選択の動機について語られたことを総括すると、自分の未来や自分自身についても未知数である高校生にとってはどの学科にも学びたいものが見つかる期待できる学び舎であった。さらに、学科の別を越えて進路選択の全体的な傾向についてみると、主に大学で学ぶこと自体が自分の人生に意味を与えるだろうといった観点から進路を考える“学問追究タイプ”と、卒業後の就職など将来設計を見据えて進路を決めていく“就職・自立志向タイプ”とに大別することができる。そして、これは本人が自覚するしないに関わらず、こうした指向性がのちの就職・就労を含めたライフヒストリーにも現れているのではないかと思われるのである。

3. 入学後の変化

入学後に感じた変化はどうであったのか、この問いに対して大きく共通するのは、「東京」への驚きや生活環境の激変など外的な変化とともに、自己成長の実感や最良な関係性の構築など内面的な変化などが複合的に重なっていることである。そして、人生の重要な

スタート地点であったことが様々な語りで明示されていた。

まず自宅通学者の場合を見ると、キャンパスでは友と語らい、通学の道すがらは東急文化会館やプラネタリウムなどといった渋谷ならではの風景を楽しみ、家庭での役割を果たしながら学生生活を謳歌したことなど、そのバイタリティ溢れる日常の語りから高校までとは比較にならないほど充実していたことが表れている。

地方出身者にとっての東京は刺激的でインパクトのある大都会であり、生活環境としても強烈で都市文化の豊かさなど何もかもが驚きに満ち、出身地との違いを痛感させ、東京でのカルチャーショックは時に自己認識を変えるほど大きなものだった。

それとは対照的に、東京の生活で夕日の美しさに気づいて自然の美に目覚めたり、東北人とわからないよう力んでいたのが地元の良さを実感したことによって方言で通そうと決意するようになるなど、東京に身を置くことでかえって地元の魅力を再発見するようなケースも見られた。

この頃は大学紛争の時代で、青山学院でも大学と短大の間に高い塀が設置され正門からは入れなかった。短大内は四大ほどの激しさはなく授業が行われていたが、デモ隊の侵入で授業が中断したこと（北海道F、1972年卒）や、その他の回想からも全くの無関係ではいられなかったこともわかる（中国F、1971年卒）。当時は政治的文化的な激動期であって、中には新宿騒乱（1968年10月）の頃を回想して「その時の凄まじさはなんとなく体験した」（北海道C、1968年卒）という話もあり、輪島研究員は本人の「文化的感受性」の高さゆえに敏感に感じ取っていたとまとめている。

さて、地方出身者の東京における新生活は、第一に学寮「シオン寮」やそれに準ずる学寮などにおける寮生活、第二に東京で暮らす姉や親戚との同居、第三に下宿での一人暮らしに大別できる。

寮生活については、まずシオン寮について見ておく必要がある。シオン寮は「基督教的高い生活環境の中で心身の修養と団体生活の訓練」を行うという方針（学則第五十三条）に沿って建設された短大の寄宿寮で、「人格完成教育のため」の重要な役割を果たすところとして運用され、第1期の調査で確認したように寮生に与えた影響は極めて大きかった。キリスト教主義教育における重要性の観点から、詳しくは別項で論じることにする。

中国Cなど準学寮で暮らした体験者には、共に過ごした寮生と現在に至るまで仲の良い交流が続いている場合が多く、シオン寮に希望したが入れず玉川寮で暮らすことになった中国Jも共同生活によって関係を築いた寮生とは今でも仲が良く、「多感な時期に仲間が多くて良かった」という感慨を述べている。

第2期には生活環境にバリエーションが増えて、第1期と比べて学寮以外の下宿生活の体験談が増えていることも特徴である。シオン寮に入寮ができず下宿で一人暮らしを始め、これまで味わったことのないような経験に直面して自立せざるを得ないと痛感したことから自立心が鍛えられたというように、一人暮らしの貴重な体験談なども聞くことができた。その他、友人と下宿したケースや、姉や祖母など親族との同居の場合もあり、中に

は自由というには程遠く親以上に厳しく躰られたというケースや、大家との交流や信頼関係を深め、華道を習い、見聞を広げる経験をしたことなど、日常生活における様々な暮らしの一端を知ることができた。

学内においては、同級生の能力的なレベルの高さに圧倒されたこと、高等部出身者には帰国子女などもいて自分とは異なる存在感を感じ、東京の強烈な都市文化に遭遇したインパクトだけでなく、全国各地から集った同級生の優秀さや多文化的な背景、地元では味わったことのないハイレベルの同級生から刺激されて自信が揺らぐ経験をしたことなど、多様な文化・価値観という刺激的体験が自己認識を刷新して成長を促す原体験となったことなどが語られていた。

入学後に結ばれていく新しい関係性の中で、自分らしさや役割を模索し自己を見出す実感や、一生の友を得て育まれる人間関係が精神的な支えとなったことなど、短大時代が自己成長においていかに重要な時期であるかが明示されていた。

地方出身者にとっては、東京というこれまで未体験だった都会の文化に圧倒されるだけでなく、下宿や寮という新しい環境で学校生活にも慣れる必要があり、授業の詰まった短大の多忙な毎日に追われるだけで精いっぱいであったが、振り返ってみればいい思い出ばかりの「楽しい」が詰まった時代だということである。特に、束縛の強い親や地元からの解放を切望していたケースでは、進学した短大では誰も自分を知らないため、自由な環境に身を置いている実感を深く味わったという。親元を離れて自由を満喫し、好きなことができる解放感は多くに共通しており、自由と解放感を存分に味わった凝縮した2年間なのであった。

都内の実家から通学していた北海道Fにとっても、青短は刺激的であった。共学の高校から入学して「女子しかない」環境に驚き、高校では男子が中心に進めていたことをすべて自分たちが執り行うことが新鮮で、青山祭の実行委員としてリーダーシップをとった経験が主体性と自己肯定感を育てる重要な契機となったという。

入学後の変化を大きくまとめると、自分自身の変化として認識され、授業の内容や先生から受けた印象の強さ、下宿や寮生活、人間関係など様々なことが相まって、濃密な関係を結び、様々な価値観に触れることで視野が広がったこと、自己成長の実感を味わっていた。何でも自由に行動できる喜びは多くに共通し、自己形成の途上において極めて重要な時期であったということが認識されていた。

4. 学業

本項では、聞き取り調査で得た授業に関するエピソードだけでなく、各学科の教育理念や教育環境などについて確認していきたい。

1965（昭和40）年で創立15年となる青短は、様々な意味で過渡期にあった。女子の高等教育機関への進学者が増加し、入学志願者の倍率は増加の一途をたどり、定員の拡大が社

会的にも要請されていた。1962年度の「児童教育科の新設は、このような社会的要請と、教育的課題に応じて、新しい質的な変化をともしつつ学生定員を増大するという方針の下で実施された」³。翌1963年度に設置された専攻科も、「短期大学制度の恒久化にともしない、短期大学教育の充実をいかにして図るべきかという視点からの構想を基本」とし、さらに1966年度に新設された教養科も「学問研究と、社会問題の複雑化にともしなう学際的な研究の動向に対応して、新しい構想をもって女子の高等教育の新生面を開拓する意図をもつものであった」⁴。

学生数の増加に伴う教室の不足なども深刻化し、校舎の増改築や施設の拡張が必須となった。これに対応するため新校舎の建設をはじめとする計画が進行し、1966年本館、1967年南校舎の新築、1968年研究館と続き、1969年に図書館と講堂、北校舎の増改築が完了した。三階建ての研究館には個人研究室が37室あり、「国文・英文・児童教育・教養の各学科の研究室が配置された」。これと並行して、1965年には中軽井沢寮が、1966年にはシオン寮が新築完成するなど、教育・研究環境の整備がなされていた⁵。

教育内容の拡充も図られ、1962年度の児童教育科に続いて1966年度からは教養科が新設され、学生総数は1500人を超えていた。開学以来の専門的な学芸を通して人間的成長を目標とする教育方針のもと、各学科における教育課程の検討や実施がなされていた⁶。以下、具体的に見ていく。

国文学科の指導理念は、「国文学だけでなく、日本文化・東洋文化について広く深い理解を得させること」「創作指導を重視して情操豊かな人間を育成すること」などであり、「本物の学問とはどういうものかを理解させたい」ということから高名な学者を揃えた⁷。1955年度から卒業論文作成のため「国文特別演習並論文」を開講し、「十分な指導をなしうる方法」として実施された⁸。短大で卒業論文を課すことには時間的な困難を伴うが、学生にとっても論文執筆を経験した意義は大きかった。

学科独自のものとして、国文学科には関西地方と『奥の細道』を辿る二つの「研究旅行」があり、単なる旅行や見学ではなく指導教授の引率のもとに行う学外研究活動というにふさわしい内容であった（1962年度から関西は人数を制限して実施されるようになった）。1966年度から他学科で入学時オリエンテーションが実施されることになり、それに合わせてこの旅行にも「教授・学生間の交流を機とする性格を従前以上に持たせるようになった」ということである⁹。

国文学科に学んだ調査協力者の語りによると、川瀬一馬、諸橋轍次、加藤楸邨（健雄）といった高名な教授陣から授業を受けたことは心に残り感慨深いものがあるようである。川瀬の『花伝書』の授業は、英文の学生が履修していることもあった。研究旅行で「奥の細道」をめぐる実地体験をしたことのほか、美術館や能楽堂を訪れた学外授業でも得るものが大きく記憶に残るようであった。その他、森野宗明、野村喬、馬越宮、青木孝などの名が挙げられた。古文の小林信明から「あるがまま」を肯定する指導を受けて自己肯定感や精神的解放感を味わったという回想も貴重である。

英文学科の場合は、自習できることは割愛して「作文会話などの力の基礎」として「読書力をつけること」に「最重点をおいた」という。英文法を必修として綿密に教えこみ、アメリカ人宣教師が英会話を担当して「効果があがり、学生は一般に会話が上達した」。また、科学的根拠によって発声を教える英語音声学や自国の言語と文学への関心を培うため国文講読を必修とし、英文講読では様々なテキストを扱った。職業科目として商業英語・貿易実務・英文タイプなど、教員免許取得希望者のために教職科目が置かれた¹⁰。1969年度にはLL教室も完成した¹¹。

当時の学生について述べた資料を見ると、「入学してくる学生の素質が揃って良かったため」「かなり程度の高いものでも平気でこなして」年々英語力・学力レベルが高くなっていると評価し、「よい学生が集まってくるのは」「青山女学院の名声」が続いているためでもあるが、現在も「入学者を失望させないだけの魅力ある内容を持ちつづけるため、みんなで懸命の努力をしていることもたしか」で、高水準な教育内容を維持・発展するための不断の努力が続けられていたのであった¹²。

調査協力者の当時の回想からは、松宮薫子の授業から知的な刺激を受けたこと、ビジネス英語などを教えていた尾崎茂から学んだことは社会に出てからも活かされ、深く記憶に残る授業であったことなど、英文学科での学びは「生き方」にも影響を与えたということである。その他、菊池裕や向山泰子、青木範夫、小田島嘉久、松山正男、西島正、エリザベス・クラークなどについて語られている。特に職業科目の商業英語や英文タイプなどは就職を見据えたスキルアップのために積極的に取り組んだ様子なども確認できた。

家政学科では1966年度からA・Bの2コース制編成に移行し、1967年度からIコース、IIコースとなった。Iコースは「生活の諸局面の分析的アプローチ」を重視し「科学的理解の徹底深化」が図られ、IIコースでは「生活を社会と家庭との構成面から理解し、創造的に設計する、広い意味での生活デザインを主旨とするもの」であった。専門領域を学問的に深める「家政特別研究」は「演習」となり、その後科目数も増やされて、学生は「専門領域では、各自の意志によってそれぞれの好む科目を深く履修し得る」とともに、現代生活を横断的に把握する領域への途も用意された¹³。

こうして変革を重ねた家政学科では、「“家政”という概念との緊張関係において、研究、教育現実の状況のなかから、教科編成が模索され、産み出されてきた」ということで、家政科を栄養士養成と直結させる安定志向を採らず、「真に独自の体制を産み出すための良心的な努力」が続けられてきたという¹⁴。さらに施設の整備運営の結果、高額な大型機器類のほかに学生が利用する基礎測定機器などを多数そろえ、短期大学家政学科としては「屈指の施設を備える」に至った¹⁵。島崎通夫、西田寿美、野村万千代、大西セチ、磯谷藤枝、阿部幸子、佐々木仁、深谷浩などについての回想のほか、被服の実習でワンピースやスーツを製作したことなど実習に関する思い出も多い。

児童教育科においても、従来のカリキュラムを見直し、1971年度から新しい課程編成がスタートした。基本構成として「教育学、心理学を基本とし、児童文学・児童福祉・音楽・

美術等の専門科目を基礎として、これに教職関係科目を付加する方針」であったという。さらに、本科で取得できる幼稚園教諭免許に加え、専攻科に進学して本科2年専攻科1年の合計3年で保母の資格も取得できるようにした。また1971年度のカリキュラムからは免許取得を学生の選択に委ねるように変更し、科目の選択も拡大した¹⁶。

教育理念として「学問芸術の基礎教育を重視する立場をとってきた」ことの意義は、「保育現場のすぐ役立つ教員という要求に直接に応えるものではなく、教員・保母としての資質の充実は、現場における自由な創造的な自己の探求にゆだねるものであった」と説明されている¹⁷。幅広いカリキュラムと、個性的な教員による授業は学生の記憶に深く刻まれており、掛井五郎、高橋好子、瀬田貞二、神宮輝夫などの名が挙がっている。多和はる（一般教育教授）は児童教育のほか複数の学科で名が挙がっている。

この頃新設された教養学科は、「人間の内的生活を豊かにし、人文・社会・自然に関する諸科学についての広い統合的理解をもつとともに、実践的判断力をもって環境に主体的に適応できる能力の基盤を養う」ことを目的とした。また、教育方法としては「演習形式による課題研究を重視し、実践的・総合的な判断力の基盤の形成」に努め、講義科目においてもできるだけ少人数で編成し「読書指導・論文指導に努める」といった方針が採られた¹⁸。

専門科目の編成は、共通科目「人類の思想と文化」にキリスト教倫理思想・東洋思想史・西洋思想史・日本文化史・比較文学・美術・社会思想史・現代社会と政治・現代社会と法律・現代社会と経済・科学技術史など、特定科目「人間の社会的形成」には教育学・心理学・社会心理学・社会学、「人間と生活環境」では文化人類学・人文地理学・都市計画・住居学・人間工学などが開設された¹⁹。

教養学科でもユニークな教授陣をそろえ、学生達の知的関心を掻き立てた。安東次男の『古事記』の授業のほか、平井照敏、幸田三郎、米澤俊治について鮮明な記憶が述べられている。学生に厳しいことで有名な小原信が担当していた「西洋思想史」については複数の証言があるが、中でも東海C（1970年卒）の場合は『第二の性』について書いたレポートが大勢の中から選ばれて発表して自分の記念になったということであった。『第二の性』は『青山学院女子短期大学新聞』1965年（昭和40）年11月1日号に書評が掲載されており、他にも読んだ短大生がいるだろうとは推察していたが、実際にレポートを書いた学生がいて小原がそれを授業で扱ったことを知り非常に驚かされた。教材ではないかもしれないが、フェミニズムやジェンダー論の古典的作品ともいわれる『第二の性』が青短の授業内で取り上げられていたことは貴重である。

また、東海H（1974卒）によれば、英文学科の稲澤秀夫が黒人文学を取り上げてウーマンリブや人種差別に言及していたという話も貴重である²⁰。Hは「青山自体が日本の女子教育に力を入れたっていう熱意」があって質の高い教育をする教員が揃っていたと語り、それを感じ取っていたことは重要である。東海支部を担当した後藤研究員は、「授業名には明示されていないが、ジェンダーやセクシュアリティを扱った先進的な授業も存在

した」とまとめている。

このように早い時期にフェミニズムやジェンダー論を取り上げていることは非常に重要であるが、それだけでなく、最新の知見や研究に対する感度の高さ、社会事象を柔軟に取り入れる積極的姿勢が教育者・研究者としてのレベルの高さを物語っているように思われる。

人間的成長を重視する教育理念は各学科の独自のカリキュラムによって展開され、教育内容を革新する努力とともに、学生自身が主体的能動的に学ぶため努力が要求されていた。卒業生の記憶には、必死に取り組んだ努力によって得た充実感や成長を感じさせる深い学びへの欲求なども強くあり、レベルの高い学習環境で研鑽を積むことが自己の人間形成の土台となるということを肌で感じる経験をしていた。このようにして、生涯学び続ける基本姿勢が備わっていったのだろう。

教員との対話によって知的好奇心を喚起され、自分を認められた肯定感が成長の土台となるなど、日常の教育の現場では学生の個性に寄り添い感性を育てていたという証言が寄せられていた。直接言葉を交わして交流することでその時にはよくわからなくても学生達は何かを感じ取っていて、そんな時間が自己形跡期の学生に様々な影響を及ぼすということなど考えさせられる事例が多かった。人それぞれ様々な学びの経験をして、その楽しさが興味関心を育て、やがて大きく花開いていくことになる。その詳細は後述する。

5. 学内外の活動・経験

5.1 部活動など

調査協力者の多くが四大・短大の部活動やサークル活動などに参加し、心に残る体験をしている。女子ばかりの短大だけでなく「もう少し違った形で新しい世界を知りたい」（東北B）ということから四大の部活への入部を決めるなど、様々な動機や目的によって自分に合った活動先を選び、寮生活や下宿、アルバイトや家業の手伝いなどの制約がある中でも積極的に活動に取り組んでいたことがわかった。

特に強烈な体験として語られているのは、グロリアスクワイアの活動としてハンセン病療養所多摩全生園や障がい者施設、児童養護施設などを訪問したことで、今でいう「共生社会」を実地で学ぶ経験になったという（東北K）。特に多摩全生園で初めてハンセン病患者から直接話を聞くことは言葉を失うような衝撃であった（東海G）。学生時代にこのような体験をしたことは貴重で、それ以後はハンセン病に関するニュースなどを理解する手助けになったことだろう。

また、シェイクスピア劇研究部で演劇に取り組んだことが後に身体表現の道へとつながっていくなど、部活を通して自己を知り不確かだった自分を発見する機会となったという事例に見るように、自分を見つめ人生を豊かにする要因にもなっていた。

青山祭実行委員会の活動としては、短大はアカデミックなものという方針で、森山良子

や加藤登紀子のコンサート企画などを実施して「女性がリーダーシップを発揮する喜びを学んだ」（北海道F）というケースや平井照敏のゼミで詩の展示を行ったこと、芥川也寸志に直接依頼して引き受けてもらえたこと（東北C）、茶会の準備で畳を借りた際に手伝ってくれた柔道部員の中に勝野洋がいたこと（北海道D）など、実際にその当時を体験した者でなければわからないようなエピソードがある。

アルバイトについては自力で探したり学校の紹介など様々なケースがあるが、映画館のアルバイトで大島渚や三島由紀夫といった文化人に接したり、淡路恵子にお茶を運んだことがある（東北A）などといった、レアな経験談を聞くことができた。

また、習い事として、華道や茶道、英会話スクール、洋裁、英文タイプやアナウンサー養成所などに通い、主体的に自分に必要な学びを深めていたことなどもわかった。

その他、寮生は門限があるため行動が制約されることが多かったが、他大学でフォークソングのコンサートが開催されると知ると帰宅時間の延長を願い出て出かけたという（中国I）。場合によってはやりたいことを我慢せずにやってみる行動力や門限延長を許可した寮監の対応などには相互の信頼関係の深さを感じさせられた。

部活や青山祭などで得た交友関係は将来を考えるに際しても影響を与え、それぞれが異なる背景を持ち卒業後の進路も様々であったために「多様な人生の選択肢」を目の当たりして「自身の生き方を相対化し」、「自己のキャリアや生き方について考える」きっかけになったという証言もある（北海道D）。

5.2 キリスト教主義教育と学寮

地方から子女が青短に進学する場合、両親にとって学寮の存在は重要であった。1964年に東海道新幹線が開通して以降、全国的な交通網の発達が上京時間を短縮させていたとはいえ、地方から子女が上京する際の条件になっていたのは先述の通りで、寮が魅力的だったという東北Cや寮がないとだめだといわれた関西Hなど、親に安心させる要件として重要であった。

この当時生じていた変化としては、寮生たちが憧れた人間的魅力にあふれた第一寮の寮監川尻知恵が1966（昭和41）年3月で定年退職したこと、また同年10月に新寮が開設したことがある。1955（S30）年頃まで「学生総数は900名以内であったので、地方出身者の半数近く、全体の20～25%の学生がシオン寮の寮生活を経験」していたということである²¹。それまでシオン寮は第一寮（約70名）と第二寮（120名）と2つに分かれていたのだが、新シオン寮に統合されると収容人数は248名の大所帯になり、寮内の施設なども整って集団生活にも様々な変化が生じていた。新旧の寮生活の違いについて、移転前後を知る寮生の次のような回想がある。

厨房が機械化されたおかげで私たちのお洗いという言葉も消えましたし、お風呂沸かしの当番も必要なくなりました。窓の外は木枯でも、中は暖房で半袖姿…。火鉢を囲

んだ風景は、まるで昔話になってしまいました。寝具の出し入れもなくなり万年床のベッドに何時でもゴロリ。私たちが自ら処理せねばならない仕事は殆どなくなり、空恐ろしいほどの快適な生活環境に恵まれたわけです。今になってみれば、二度と来ない短い寮生活の間に、あの質素な中にも家庭的な和やかさの金王町時代の寮と、じゅうぶんに完備されたデラックスムードの大世帯の生活と、二つの世界を経験できて好運だったのかも知れません²²。

このように新シオン寮への移転にともなう変化はあったが、一部屋4人の集団生活や食堂での食事や行事などを通して寮生全体のコミュニケーションが図られるなど基本的な生活部分は継続された。一部屋4人の共同生活を基本とした寮生活は人間関係や自己形成を支えるものとなり、自立への主体形成に重要な役割を果たしていたことが確認できる。例えば消灯後のおしゃべりが「互いの悩みや夢を共有する貴重な時間」(北海道E)であったというように、密度の濃い関係性が学生生活や精神的な支えとなり、居心地のよい場所を見つけたという感覚や安心感を得たといった思い出として語られている。

このように教育寮として機能したシオン寮における体験の効果は大きく、ここで育まれた絆は今も健在であるという。寮生活によって学んだ自律、全国各地の生活習慣の違いによる文化的背景、多様な価値観を知ることは他者に向き合う姿勢などの土台になっていく。寮生活を共にした経験やそこで見出す安息の感覚も心身を支える大切なものであった。シオン寮の寮監川尻知恵の姿に憧れ卒業直前に受洗した東北Aやキリスト教学を担当し後に青山学院院長となる深町正信から多大な影響を受けた東海Hなどにみるように、人間的な魅力で学生達を感化したキリスト教指導者の存在も大きかった。

日常的な環境として、朝夕の礼拝や日曜日に通う近隣の教会の礼拝参加などによって自然に賛美歌を口ずさむようになるなど、生活の中でキリスト教が根付いていったという証言に見るように教育寮としてのシオン寮の意義はなお高かった。教員が講話をする夕拝の思い出や歌舞伎の観劇によってカルチャーショックを受けたことなど、第1期に共通する文化的体験が記憶に残っているケースも見られた。

また親族がクリスチャンであった、あるいは日曜学校や中高ミッションスクール出身などでキリスト教へのシンパシーのある場合だけでなく、短大で初めてキリスト教に触れた場合でも柔軟に受け止めていることが多い。高等部からの進学者については、礼拝が日課であった高等部と違って自由であることを新鮮に感じたり反動で礼拝に参加しなかったりと各々が自由に判断していたこと、短大で受洗したケースなどもある。また、後年受洗したケースもある。受洗した中に、その後結婚して婚家の慣習に合わせつつ可能な形で教会に行くというように柔軟な暮らしぶりが見られ、実に様々だということがわかる。

卒業式に「仰げば尊し」を歌わなかったことに驚き深く心に刻んだ東北Eの回想は青短の理念や本質を感覚的に掴んでいるようで印象的であるが、そこまで強いインパクトは少なくとも、青短では授業や宗教活動などでキリスト教に接する機会が多く、異文化体験のよ

うな刺激や未知の価値観に触れたことで視野の広がりを実感することにもなっていた。その後のライフヒストリーを見ると、キリスト教の精神を自然に受容して、他者との向き合い方や前向きに生きる姿勢など人としての在り方の根底に息づいているように思われるのである。

6. 卒業後の進路及び社会活動・ボランティア・生涯学習

6.1 卒業後の進路について

今回の聞き取り調査によって、昭和40年代（1965年～）の青短は求人が多く就職に有利であった状況が確認できた。表3にみるように、就職決定者数は年々増加傾向にあった。ただし、この世代においても女性は就職して数年で結婚退職するのが当たり前とされ、東京や首都圏でも同様の社会通念として根強かった。企業は四大卒より短大卒女性を採用する傾向にあり、就職先が多くあっても自宅通勤が前提のために地方出身者が都内で就職を希望する場合は東京近郊に親類がいるなど東京で生活可能でなければ応募しようのない厳しい現状が続いていた。また学生運動の余波もあって、青学祭実行委員の活動が学生運動であると誤解され内定を取り消された事例も見られた。

首都圏での就職先としては、銀行や航空会社、総合商社など名だたる有名企業への就職率が高く、その他、丸善、旅行代理店や広告代理店、商船三井の子会社、幼稚園、家業に従事、青山学院や短大で働いたケースなど様々な事例が見られた。地方出身者の場合は、銀行や地元企業、放送局、保険会社などの事例が多かった。

さらに、求人が増加傾向であったとはいえ、多くの場合が3年程度就労した後は結婚退職することが通例であった。実際に、働き続ける意思があっても、3年を過ぎると職場の風当たりが強く居づらくなって退職したという話も多く聞かれた。また、ゼネコン就職後の研修で君たちはお嫁さん候補として雇っているのだといわれて違和感を覚えたものの飲み込むしかなかったという体験など、当時の社内の様相が伝わってくる話も聞かれた。

中には女性にも男性と同様に働いてもらうといった企業もあるが、多くの場合は不本意な業務や配属先であるなど働き続けるには様々な苦労が伴った。その中で印象的だったのは東海Hの事例で、Hは結婚せずに働き続け開発に携わった商品がコロナ禍でヒットした経験などを持つ。必ずしも希望した部署でない場合もあったが、苦手分野でこそ力が発揮される、無駄な経験は一つもなく次に活かされるのだと気づいたと語り、前向きな姿勢で乗り切っていたことがわかる。第1期に引き続き性別役割分業が根強い状況にあって、企業は男性中心社会で女性の昇進や長期的なキャリア設計が難しい実状であった。一般的にいても任される仕事はコピー取りやお茶汲みなどが多く、男女雇用機会均等法施行以前は女性の管理職登用はほとんどなかった時代である。それでもHは、「どこかで女性にも道が開けるように先駆者になりたい」との思いを抱いていたといい、未来に希望を見据えて努力を続けた女性達の姿勢には胸が熱くなる。

やりたい仕事を求めて妥協せずに退職し、自身で新たな職場を見つけていくポジティブな四国Dの姿勢も爽快である。地方放送局で定年まで勤めた四国Hは、職場や夫の理解があって続けられたと話している。また、県庁の外郭団体で結婚後も13年間働き続けていた中国Jは、長男の嫁として義母の介護のために断腸の思いで退職したということである。

就職率は上昇し様々な職場に進出していたとはいえ結婚退職が前提で、女性には家事・育児・介護などの役割が求められていた状況の中で大きな人生展開を辿った事例も見られた。例えば、PTA活動で会長を務めたことを契機に市議会議員に立候補し、草の根運動の成果で当選した九州Cは「日頃から教育や環境、女性の社会進出などの問題点を生活者の視点から問いかけたい」という強い思いがあり、それを家族が理解し応援があって立候補できたと当時を振り返っている。

また、大学に編入学した後さらに歯科大学に進学して歯科医師になった九州Dや、専門学校の教員になった九州Eなどは、自分の置かれた実状に応じて主体的に勉強を続けたことが人生の急展開を加速させているように思われる。これらのケースをまとめた菅野研究員は「男性と同じ土俵で社会活動を行う卒業生がいたことは特筆すべきこと」とし、「生活者の視点で行われた」ことも注視している。こうした人生展開には、それぞれの原動力として尽きることなく湧き上がる向上心や向学心といったものを感じさせられる。

さらに、ウーマンリブの時代を経た世代であることの反映といえそうな事例も見られた。例えば、フリーのライターをライフワークとして社会的なテーマを扱って多くの受章歴のある北海道Cは「ウィメンズネット旭川」を設立してDV被害者のシェルター活動にも取り組み、「シスターフッドを共有する場である」と語っている。

同様に「ウィメンズネット・こうべ」の中心的な役割を担い、DV被害者支援センターの活動に尽力した関西Aのケースからは短大での学びが次々と開花していくような印象を受けた。Aはウィメンズ・カウンセリングを学ぶなど自己研鑽を積み、家裁調停員やカウンセラーとして地域の女性達のために貢献し、「放っておけないという気持ち一筋」から激務をこなしたという。その生き方には、自分一人の人生の充実にとどまらない広い視野とシスターフッドの精神の体現を見るようである。Aについてまとめた趙研究員は、短大教員であったエリザベス・クラークの影響について述べているが、卒業後であっても学生時代に接点を持った教員の教育や活動などから影響を受ける可能性があるということに私たちも強い衝撃を受けていた。

地方出身者について全体的な傾向としていえるのは、第1期によく聞かれた花嫁修業が減って紹介による就職が一般的になっており、父親が銀行に願書を送っていた事例が複数見られた。特に地方では、就職まで親がレールをひくことが珍しくなかったともいえるのだろう。

しかし、どんなライフコースにせよその選択は自分自身であって、結婚についても見合いもあるが社内や学生時代の出会いなどきっかけは様々であり、また社会的にも離婚が自由な選択肢になってきていたこともあって、協力者の人生にもその事例が見られるのはむ

しろ当然のことであった。

短大卒業生の進路については、第1期と同様に一般的には就職・結婚・専業主婦というルートで括られることになるのだろうが、その内実はそれぞれの個性の滲む多様さがあって今回も貴重な気づきを得ることができた。その特徴としては以下の四つにまとめられ、前者二つは第1期から継続する特徴として、後者の二つは新たな傾向として浮上したものである。

第一に、多様な形で就労を続けていることであり、結婚退職後も様々な契機から働き始めるケースも多く、生きがいやライフワークとして自己実現している。例えば、自宅でエレクトーン教室や塾を開く、銀行のパート、サロンの経営、ケアマネジャーの資格を取って就労するなどの事例がある。子育て中の30歳頃に建築士の免許を取得して60歳まで働いたという四国Bの場合は、生活を科学的・総合的に学ぶ家政学科の履修で住居学と出会い、そこで生じた興味が長く続いていたことが人生を牽引する力になっているようである。

第二に、夫と協働して社会貢献をしているケースである。卒業生の中には中国Cのように夫の実家が歴史と伝統のある名家であり由緒ある所蔵品を公開する美術館の運営に尽力している事例や、市議会議員や医師の妻として地域で重要な役職を果たす夫を支える役割を担っている事例、夫の実家の家業である老舗旅館の経営に携わり、夫婦で変革・発展させていったケースなどがある。こうした事例は、短大時代から培われていた興味関心が花開き適材適所であったように思われるが、しかしそれ以上に茶道や習字などに取り組むなど本人の自発的な自己修養が家業の運営・発展を支える土台となっていることも見逃せないところである。

第三に、夫の海外赴任に伴って国外生活の経験者が多くなっていることである。日本だけでなく海外を知る経験によって、帰国後に様々な国際交流やボランティア活動へとつながっていくケースも多かった。中国Cはキャビンアテンダントとして国内外を見ているが、結婚後も夫の転勤で海外赴任を経験している国際派の夫妻として知られている。

第四に、四大への編入や専攻科への進学、短大の副手、東京イングリッシュセンターで英会話を学ぶなど、さらに学問追究する方向に進んだケースが以前よりも増えていることである。

以上のような事例から、どのような形にせよ卒業の後も自分自身の道を模索し開拓し続けていく能動的な在り方、バリエーション豊かな実践について知ることができた。

6.2 趣味やボランティア、同窓会活動など

卒業生全体のライフヒストリーにおいて、趣味やボランティア活動などに継続して参加しているケースが極めて多いことがわかる。第1期と同様、多くの場合、出産・育児、義父母との同居や家業の手伝い、介護などやるべきことが多くあって時間的な余裕はないはずであるが、短大時代に鍛えられたタフさがあるためなのか、自分の可能な形で多種多様な活動を行っているのである。第1期の研究報告で用いた分類を援用してまとめると、以

下のようになる。

第一に、趣味や技芸を通じて人生を楽しみ、自己研鑽を積んでいるケースである（書道、茶道、絵画、スポーツ、フルート、ポーセリン・アート、英語、フランス語、中国語、ライター、合唱など）。七宝焼きなど創作活動に従事して生涯学習の場で指導する北海道Fの場合などが好例である。

第二に、高齢者や障がい者、子どものほか社会的マイノリティへの奉仕活動などに見るように、社会福祉的なボランティアを行っているケースである（「いのちの電話」の相談員ボランティア、カウンセラー、国際センターボランティア、環境団体へのボランティア参加、結婚相談所のボランティア、市の放課後事業の地域協力員、社内ボランティア、消費生活アドバイザー、手話活動による障がい者支援、DV被害者支援活動、外国人支援読み聞かせボランティアなど）。

第三に、短大で学んだことを基礎に自身の強みを活かした社会・文化活動に尽力しているケースである（国際ソロプチミスト、OISCA（オイスカ）、国際交流、ホームステイの受け入れ、英語教室、学研の幼児教室、公文教室、日本語教師、パソコン教室、書道教室、ピアノ教師、観光案内所勤務など）。

第四に、PTAや自治会、子ども会、青少年委員会、教育委員、地域協力員など地域で求められる重要な役割を担っているケースである。ここに該当する家事調停委員は、弁護士資格者や専門的知識経験を有する者に並び「社会生活の上で豊富な知識経験」を有し「人格識見の高い」者であることとされている（「民事調停委員及び家事調停委員規則」参照）。

当然のことながら、以上の分類は厳密なものではなく複合的であって、一人で多く担っているケースもある。自分の専門性を活かした活動は、生涯教育を推進する役割を果たすことにもなっていた。今回の調査では、資格取得者やカウンセラーが多い印象を受けた。

この研究プロジェクトが短大同窓会の理解と支援に支えられていることもあって調査協力者は同窓会活動に何らかの形で関わっている場合が多く、同窓会の担っている役割の重要性を改めて考えさせられた。第1期の報告でも論じたが、同窓会はボランティアなどの奉仕活動と学習の場を企画し、同窓生が教養を深め続ける機会を提供し、調査協力者は支部長はじめ様々な形で役割を担ってきた。特に災害時には同窓会のネットワークを駆使して被災者救済のため迅速に支援してきた実績があるなど、重要な役割を果たし続けている。日常的にも悩み事が相談できる安心感があり先輩の助言・生き方に励まされたという事例など数多く、長年にわたり様々な年代の同窓生が集い、継続した交流によって信頼を積み重ねている同窓会の存在意義を改めて認識することとなった。

同窓会設立を推進した学長の幸田三郎は、教育とは「個人の自己実現・自己形成・自己変革の過程」であり、「他から与えられるもの」ではなく「新しい価値をみずからの努力によって自分のうちに生み出してゆくこと」であり、また「生活のすべての場において」生涯にわたりなされる「主体的営み」であると学び続けることの重要性を論じていた²³。

1974年11月同窓会が設立され、生涯学習の機会を提供し、参加した同窓生の学習意欲はさらに高まるというように好循環で機能している。同窓会は、出会い直しの場でもある。いつでもだれでも無理せずに参加できる学びと奉仕の場である。青短といえど同窓会、「自分の居場所」という表現に見るように、かけがえのない時間を過ごす大切な場として共有されている。

7. 人生における「青短」の意義

Q6の設問に対する回答から、「青短」のもつ意味を考察した結果を以下にまとめていく。

第一に、「自由になった」という表現が示すように、自由を得たこと、その解放感を味わったというだけでなく、自立した個を獲得した喜びなど深い思いも込められている。その背景には、地元を離れて東京での一人暮らしの経験が力になっていること、伸びやかに自己成長していく実感などが伴っていた。

第二に、生涯の友や尊敬できる先輩たちを得た、大切な人間関係を結んだ出会いの場であったことである。例えば、映画や芸術への関心を共有し高め合える仲間との出会いが、視野を広げ自分らしい足跡を刻む原点となったというケースなどがある。

第三に、「バックボーン」「礎」「後ろ盾」「人間が豊かになった気がする」といった言葉が伝えているように、自分を支える精神的土台として確かなものを得たことである。質の高い教育の場で優れた教員に接した刺激、同級生らと切磋琢磨することで学力が向上し、高度な知性・知力の獲得に向けて目指すべき在り方など、自分を支える知的な基盤を得た手ごたえなども感じ取れる。「その後の人生の『骨格の一つ』」という表現には、青短が自分の殻を破り価値観を広げる場であったという思いがある。

第四に、自分を認め、信じる心を育んだその精神的意義である。教員にありのままの自分の言葉で表現すればよいと促された経験は、自己を受容し他者を尊重する人間力を育んだ。ありのままの自分をまず認め、自分を信じる力を培い、心の土台となった自己肯定感は生涯の宝となった。「私でもやっていける」という自信や自分の可能性を信じること、「すぐく居心地の良い所」という表現にも、同様の感覚がある。あるがままの自分を認められた経験はあるがままに相手を受容する基本姿勢を作ったのだといえよう。教員のかけた言葉の力、一人一人の個性を伸ばしていく影響力の大きさを改めて再認識させられた。

そして総体として、「有意義な学生生活」「得難い時間」「かけがえのない青春」「青春そのもの」「人生の中で一番輝ける時代」などのように、人生で最も光り輝く貴重な時間であり、その尊さや充実感に満ちた表現にはそれぞれの人生における重要性が明示されている。

ここで改めて考えておきたいのは、青山／青短の「ブランド力」についてである。今回は以前にも増してこの表現がよく見られたが、卒業した後に青山学院のブランド力やネー

ムバリューを実感したという話や、短大卒のソフトなイメージも加わることで好感度が増すことを実感したことなど多くの事例が寄せられていた。

注目すべきなのは、周囲からの高評価といった側面だけではなく、青短ブランドが心の支えになったことである。自分のプライド、自信、どんなことも乗り越えられる「安定剤」、窮地にあっても自分を信じ乗り越えるばねになるなどと語られているように、青短を卒業した「誇り」が人生で苦境に立たされても自分を鼓舞する力になるというのであった。2年間に凝縮された教育内容を修得するのは容易ではなく、努力して成し遂げた日々の積み重ねがあって自分を信じて乗り越える力、「誇り」になっているところが重要である。

つまり、学生時代に自分自身が奮闘努力した事実や実感があってこそその「ブランド力」であり、さらに友人や先輩にそれに恥じない生き方を見るなど一人一人の卒業生の在り方によって「ブランド力」が支えられているといえるのである。

8. おわりに

今回の聞き取り調査から明らかとなったのは、第1期に引き続き女性の生き方の多様性とその豊かさである。高度経済成長期に定着していく性別役割分業意識を前提とする社会の中で、長期的なキャリア形成が難しかった時代にあって孤軍奮闘した卒業生らは、次の世代の女性達がよりよい環境で働くことができるようにという思いも抱いていた。

第二に、ライフサイクルにおいて社会奉仕の実践が様々な形でなされていたことである。支部の同窓会は、いつでも参加が可能で、主体的な学びと奉仕活動に取り組めるサードプレイスとして機能していることも重要であった。

専業主婦層のライフヒストリーの実情把握とその調査分析は今ではジェンダー学のあまり注目しないところであるが、ライフコースの岐路にあってどんな立場であれ自分らしく生きるために格闘してきた結果、教育におけるジェンダー格差をなくし、女性の長期的キャリア形成を当たり前のこととする道を切り開いてきたといえるのである。

前述した幸田学長のみならず学びには終りが無いといったメッセージは他にも数多くあり、例えば国文の川瀬は「ここで養われた基礎の上に立って」「国文学の作品を味読して、自己を生涯発展させる主要なる原動力としてほしいと願う」と述べ²⁴、英文の西島正は卒業後が本当のスタートで「自分の足で生き、自分の頭で思索し、自分の力で本を読み、ずっと勉強をつづけてください」とエールを送っていた²⁵。

また幸田は、大学とは学問研究の方法と態度とを学ぶところであるとし、「厳しい知的訓練」を自分自身に課すことが必要で、その点では四大と変わらず、そうした訓練によって高度な教養を体得できると述べている²⁶。家政の阿部が「二年間の勉強で奈良女子やお茶の水女子大の家政学部と同じレベルにする！」という熱意を見せていたという話（高等部A）、教養学科で「東大の教養学部と同じことをやるんですよ」と聞いた話（東海C）などにみるように、学長はじめ各教員は四大に引けを取らない教育の提供に余念がなかつ

た。

さらに、大学生生活の意義について、前掲の西島は次のように述べていた。

教養とは。学校でならったすべての知識を忘れ去ったあとに残るサムシングです。これは独学で勉強した人の得られないものです。大学という雰囲気の中かで知らず知らずのうちに獲得したセンスです。これは学園で人と人との接触一切磋琢磨とでもいうべきものによって形成されるものです。²⁷

こうした教員からのメッセージは、学生達が身を置いていた教養主義による教育／学習環境のレベルの高さや知的な豊かさなどを彷彿とさせるものである。調査協力者たちが半世紀近く経っても教員や授業の記憶を語っていることには驚かされるが、それと同時に、名前は出てこないが「挙げたらきりが無い程いい先生方ばかりだった」という証言も多かったことを明記しておきたい。

最後に、卒業生にとって青山学院女子教育の意義についてまとめる。入学した学生たちは高度な知識・教養を得たいと必死に努力を積み重ね、真摯な取り組みによって学問の世界に触れたことで、卒業後も「もっと学びたい」という欲求を深めることにもなっていた。このように2年間の大学生活で培った学問に向き合う基本姿勢は卒業後も長く続き、広く職業や社会奉仕活動などに活かされていた。また、女性が主体性を発揮できる青短という学び舎は学生の積極的な行動力や決断力を育て、就職活動はじめ家庭生活、その後の働き方や社会奉仕、自分らしく学び続けることを推進する力になった。教育的意義という観点から見た時、青山ブランドはその社会的評価や卒業生としての誇りというだけでなく、それにふさわしい存在として常に自分を高める向上力や自身を鼓舞する力になっていた。

以上のように、第2期の聞き取り調査においても青短の女子教育が学生にどのような影響を与えたのか、卒業生のライフヒストリーも含めて具体的に明らかにすることができた。それぞれの事情に応じた働き方や学びを続けて社会に貢献する歩みには、どんな環境にあっても自分を活かし主体的に人生を切り拓いていく一人一人の在り方が刻まれている。私たちは今、西島のいう「サムシング」が様々な形で輝いているのを目にしているのである。

【注】

- 1 下記「学校基本調査」（文部科学省）年次統計の進学率より作成した。
<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147040>（2026年1月7日閲覧）
- 2 青山学院女子短期大学編集・発行『青山学院女子短期大学の歩み』（以下『歩み』）1975年、334～335頁掲載「入学者の出身地域」のデータ参照。
- 3 同上『歩み』104頁。
- 4 同上、104～105頁。

- 5 同上、158～160頁。「研究館」は本研究プロジェクト研究員が在勤していた頃は「研究棟」と呼ばれていた。
- 6 同上、105～106頁。
- 7 同上、106頁。
- 8 同上、108～109頁。
- 9 同上、109～110頁。
- 10 同上、110～112頁。
- 11 同上、115頁。
- 12 同上、115～116頁。
- 13 同上、118～120頁。
- 14 同上、120頁。
- 15 同上、123頁。
- 16 同上、127～128頁。
- 17 同上、128頁
- 18 同上、133～134頁。
- 19 同上、134頁。
- 20 稲澤は1971年3月～1972年2月までアメリカで在外研究をしており（『歩み』313頁）、そこで得た知見が授業にも活かされていた可能性が高いのではないと思われる。
- 21 同上、167頁。
- 22 『青山クーリエ』17号、1974年2月発行、『歩み』169～170頁より引用。
- 23 「生涯教育と短期大学」『青山学報』第68号1973年12月10日掲載。
- 24 「国文科卒業生に」『青山学院女子短期大学新聞』（以下『青短新聞』）1954年2月6日。
- 25 「卒業生諸姉へ」『青短新聞』1962年2月5日。
- 26 「学生の皆さんへ 厳しい知的訓練を」『青短新聞』1964年9月14日。これに関連して、学芸懇話会について付記しておきたい。学芸懇話会は1967年4月に教員と学生の研究活動の促進と教養を深めることを目的として設置され、会誌『学芸』の発刊や「学芸シリーズ」の刊行、各種の集会活動などを行うこととされた。これは、大学紛争が激しくなる中で「教職員と全学生をつつむ対話の場を設定し、大学共同体の形成に寄与することを意図したもの」であるという。1967年度の活動内容は、全学講演として松岡洋子「日本における女性と政治」、日本合唱協会による音楽会を実施し、課外講座として「デッサンの会」、青山祭期間には児童教育の松崎巖による「北欧の文化と教育」の講演が開催された。また分科会活動として、淀井利雄「ヨーロッパの古典芸術」、江藤淳「夏目漱石と英文学」、桜井義人「たべものの保蔵」、山本健吉「日本の詩歌」、古川哲史「純粋と全力的」の講演会が各科の企画として実施された。同年12月に刊行された『学芸』について幸田学長は、教員の専門に即した論説、随想、書評などによって学生が「専門以外の領域に対する眼が開かれ、新しい世界に対する興味と関心をもつよう」になり、また学生も「専門分野に関する学習成果や思索の結果を」発表する場として研究意欲を高

められるであろうとし、会誌発行の趣旨は大学共同体の形成に寄与するところにあると述べていた（『歩み』243～246頁）。各号に掲載された座談会は、以下のようなものであった（『歩み』247頁）。

- 1号 「大学教育はアクセサリーか？」（S42年12月5日発行）
- 2号 「流行—むかしと今と」（S43年6月30日発行）
- 3号 「学園紛争、最近の激しい風潮をどう考えるか」（S44年2月15日発行）
- 4号 「女子教育と大学」（S44年9月1日発行）
- 6号 開学20年特集「女子短期大学開学のころ」「短大開学前後の学生たち」（S45年9月25日発行）
- 27 「新入生諸姉へ」『青短新聞』1962年5月2日。

表2 入学定員・志願者・合格者一覧

		国 文			英 文			家 政		
年 度		定 員	志 願 者	合 格 者	定 員	志 願 者	合 格 者	定 員	志 願 者	合 格 者
39	1964	100	948	183	200	1467	292	100	381	146
40	1965	100	1,426	192	200	2,265	309	100	678	156
41	1966	100	1,276	188	200	2,455	285	100	836	140
42	1967	100	914	240	200	1,721	336	100	691	196
43	1968	150	1,312	238	200	2,269	342	150	686	196
44	1969	150	1,547	242	200	2,535	339	150	688	203
45	1970	150	1,181	253	200	2,078	348	150	625	203
46	1971	150	1,094	273	200	2,215	395	150	654	221
47	1972	150	1,179	251	200	2,348	395	150	1,298	221
48	1973	150	1,361	240	200	2,494	335	150	1,475	208
49	1974	150	1,411	245	200	2,326	360	150	1,244	239
50	1975	150	1,296	259	200	2,219	360	150	1,517	223

注 志願者・合格者には推薦入学者は含まない。
 (『青山学院女子短期大学の歩み』1975年、320～321頁より作成)

表3 卒業者の進路動向

		国 文				英 文				家 政			
卒 業 年		卒 業 者 数	就 職 決 定 者 数	進 学 者 数	家 事 そ の 他	卒 業 者 数	就 職 決 定 者 数	進 学 者 数	家 事 そ の 他	卒 業 者 数	就 職 決 定 者 数	進 学 者 数	家 事 そ の 他
39	1964	184	104	29	51	311	219	36	56	155	66	28	61
40	1965	179	95	23	61	290	193	32	65	137	81	15	41
41	1966	186	109	22	55	326	214	49	63	146	69	23	54
42	1967	189	122	24	43	318	215	49	54	150	79	24	47
43	1968	184	124	33	27	292	222	35	35	141	83	41	17
44	1969	238	170	30	38	356	242	59	55	198	112	58	28
45	1970	227	163	27	37	347	247	46	54	192	121	35	36
46	1971	226	148	35	43	338	249	38	51	193	120	43	30
47	1972	232	155	36	41	336	262	40	34	197	118	39	40
48	1973	244	178	40	26	357	265	52	40	197	125	38	34
49	1974	226	176	33	17	342	283	33	26	194	126	45	23

注 卒業者数は3月卒業者。就職決定者は卒業年の4月現在の状況を示す。家事その他には就職未決定者で待機中の者を含む。(前掲『歩み』328～329頁より作成)

児 童 教 育			教 養			計		
定員	志願者	合格者	定員	志願者	合格者	定員	志願者	合格者
50	525	63				450	3,321	690
50	736	64				450	5,105	721
50	761	64	80	1,454	88	530	6,782	765
50	656	66	80	711	116	530	4,693	954
100	800	108	100	1,650	116	700	6,717	1,000
100	988	116	100	1,612	109	700	7,370	1,009
100	899	117	100	1,381	127	700	6,164	1,048
100	828	126	100	1,473	137	700	6,264	1,152
100	763	130	100	1,038	134	700	6,626	1,131
100	964	119	100	1,303	134	700	7,597	1,036
100	1,017	124	100	1,310	127	700	7,308	1,095
100	1,146	116	100	1,184	133	700	7,362	1,091

児 童 教 育				教 養				専攻科				全 学			
卒業 者数	就職 決定 者数	進 学 者 数	家事 その 他	卒業 者数	就職 決定 者数	進 学 者 数	家事 その 他	卒業 者数	就職 決定 者数	進 学 者 数	家事 その 他	修了 者 総 数	就職 者 の 比 率	進 学 者 の 比 率	家事 その 他 の 比 率
69	45	7	17					52	15	0	37	771	58.2	13.0	28.8
64	47	7	10					46	16	0	30	716	60.3	10.8	28.9
69	44	14	11					35	15	0	20	762	59.2	14.2	26.6
68	36	12	20					53	29	0	24	778	61.8	14.0	24.2
72	50	14	8	87	63	13	11	44	18	8	18	820	68.3	17.6	14.1
67	52	14	1	124	71	34	19	60	28	9	24	1,043	64.9	19.6	15.5
112	67	23	22	110	76	18	16	64	28	9	27	1,052	66.7	15.0	18.3
111	75	19	17	99	72	9	18	68	32	7	29	1,035	67.2	14.6	18.2
103	76	15	12	112	73	25	14	85	39	11	35	1,065	67.9	15.6	16.5
114	76	30	8	107	77	17	13	77	54	0	23	1,096	70.7	16.2	13.1
116	68	37	11	118	84	29	5	104	80	2	22	1,100	74.3	16.3	9.4